

2026 年 2 月 20 日
こども家庭庁

【イベントレポート】

活動の枠を超え産官学民が連携し、現場から生まれる“できること”を探る

「こどものまわりのおとなサミット」を 2 月 6 日（金）に開催

～“こどもまんなか”の重要性と持続可能性を支えるコミュニティづくりとは～

2025 年度の活動内容を振り返る「こどもまんなかアクション 2025 年度 活動報告」も実施

こども家庭庁は、日々こどもや若者、子育て支援に向き合う大人たちがディスカッションする場として「こどものまわりのおとなサミット 2025」を 2026 年 2 月 6 日（金）に霞が関プラザホールにて開催しました。当日は全国各地で“こどもまんなか応援サポーター”として活動する「こどものまわりのおとなたち」が集まり、それぞれの団体の活動内容を紹介した後、こども・子育て支援の現場で得られた知見の共有やディスカッションを行いました。

また、サミット後にこども家庭庁 成育局 成育環境課長兼こどもまんなかアクション推進室長・安里 賀奈子より、2025 年度の活動を通じて「こどもまんなかアクション」がどのように全国へ広がったのかを報告する「こどもまんなかアクション 2025 年度活動報告」も併せて行いました。



こども家庭庁は、こどもや子育てを応援する社会づくりの気運を高めることを目的に、「こどもまんなかアクション」を推進しています。「こどものまわりのおとなサミット 2025」は、「こどもまんなかアクション」への理解を深め、その取組をより広く社会に浸透させることを目的として開催しています。

PRESS RELEASE

本イベントには、日本全国から多様な関係者や支援団体、自治体などが集い、ウェルビーイング（Well-being）の観点から、「こどもまんなか社会」の実現と、こどもが安心して過ごせる社会のあり方について考え、議論・共有する場となりました。

当日はオンラインも含め約 180 人が参加し、各団体が持つそれぞれの特徴的な活動内容に対して高い関心が寄せられるとともに、継続的かつサステナブルに活動を続けていくうえで重要なポイントについても意見が交わされ、多様な視点からの発言を通じて理解を深める有意義な時間となりました。

▼アーカイブ配信

公式 YouTubeURL : <https://youtu.be/EzKdVPzWCSc>

■「こどものまわりのおとなサミット 2025」

<団体活動発表>

第 1 部では、各団体の活動内容の紹介に加え、「今日これだけは話しておきたいこと」をそれぞれがフリップに書き出し、思い思いに共有する形で進行了しました。意見や思いをイラストや文字で表しながら対話を深めるグラフィックファシリテーションの手法を取り入れ、各団体の具体的な取り組みや、それぞれの考え方について理解を深めるディスカッションを展開していきました。

●NPO 法人 ベビースマイル石巻「声や気持ちを羅針盤に、こどもとおとなの育ち合う“力”を信じてつなぐ 地域をエンパワー」

ベビースマイル石巻・荒木氏は、東日本大震災での自身の妊娠・子育ての経験を活動の原点としていると語りました。その経験を通じて、命の力やこども・若い世代が地域復興に果たす重要性を実感したと言います。また、子育て当事者同士がつながり、安心して気持ちを共有できる場が人を支え、地域の力を生み出すことを実感したことから、当事者の声を社会や行政に届ける活動を展開してきたと話しました。



PRESS RELEASE

●一般社団法人 未来の準備室「線を引かず、橋をかけよう」

未来の準備室・青砥氏は古民家を改装した、高校生が無料で利用できるカフェ「EMANON」を運営しています。

「EMANON」は、高校生にとっての居場所として、安心して過ごせる場の提供に加え、個々の関心や課題を活動につなげる探究、プロジェクトの拠点として機能しています。また、地域と高校生をつなぐ橋渡しの役割を担っていることについて紹介しました。



●株式会社埼玉りそな銀行「お手伝いしたい企業はたくさんいます」

埼玉りそな銀行・鈴木氏は、「企業は地域とともに発展する存在である」という理念のもと、こどもの居場所づくりに取り組んでいると語りました。銀行支店や未利用施設を活用した居場所の開設を進め、現在は複数拠点で多様な子どもたちを受け入れています。また、NPO との連携や行員の派遣を通じて、企業と地域・支援団体をつなぐ仕組みづくりを行い、企業の力を地域課題の解決に生かすモデルの構築を目指したい。と今後の展望についても話しました。



●NPO 法人 じっくらあと「子どもの視点も大人の視点も大事、ポイントは“ゆるやかな私混同”」

じっくらあと・小浦氏は、医療・福祉・教育が連動した地域ケアを軸に、子どもと大人を支える取り組みを展開しており、学校外で安心して過ごせる居場所づくりや性教育、ライフスキル支援など、自身が行うこどもの成長段階に応じた多様な活動を展開しています。取り組む上で、地域に寄り添い続ける姿勢を大切に、「小さなすれ違いを支えに変える」関係づくりを目指して活動を展開していると話しました。



PRESS RELEASE

●一般社団法人 JUNTOS 「“ちがい”は私たちをつなぐ“カギ”」

JUNTOS・吉村氏は「友だちでも先生でもない、身近な大人」としてこどもに寄り添い、自由に過ごせるフリースペースや地域イベントを通じて、多様な背景を持つ人々が交わる場を生み出しています。違いを課題としてではなく「人をつなぐ鍵」と捉え、こどもと大人が共に育ち合う関係性を大切に活動を行っている、自身の活動内容を報告しました。



●学校法人南九州学園 南九州大学 「“ななめ”でつながる地域に！」

南九州大学・宮内氏は大学・地域・こどもが「斜めにつながる」関係性を軸とした「斜めプロジェクト」を展開しており、大学キャンパスをこどもの居場所として開放し、不登校支援や多様な学びの場を教育委員会と連携して実施していると語りました。また、学生が専門性を生かして地域に関わり、現場で学ぶ循環を生み出すことで、大学を“地域とともに未来をつくる拠点”へと変えていく挑戦の真っ最中だと話しました。



<フィッシュボウル形式セッション>

●「見えない壁」をどう越えるか～学校・地域・大人のあいだにある境界線～

「フィッシュボウル形式セッション」では、学校と地域、支援者と教育現場のあいだに存在する「見えない壁」について、多くの声が共有されました。地域の大人が学校に関わろうとする際の心理的・制度的なハードルや、「察してほしい」と求められる暗黙のルールなど、現場で感じる難しさが語られました。一方で、月1回の保健室カフェや出張ラボといった地道な関わりを積み重ねることで、少しずつ信頼関係を築き、壁を越えてきた実践も紹介されました。自ら線を引くのではなく、時間をかけて橋をかけていくことの重要性が参加者の共通認識として浮かび上がりました。



PRESS RELEASE

●こどもをまんなかに置くことで生まれる協働と循環

議論を通じて繰り返し語られたのは、「こどもをまんなかに置く」という視点の力でした。立場や背景、役割が異なる大人同士でも、「こどもにとって何が一番よいか」という問いに立ち返ることで、対話や協働の土台が生まれることが共有されました。また、大学生や高校生といった“大人とこどもの間に位置する”存在が積極的に関わることで、こどもにとっても、大人や学生にとっても学び合いの循環が生まれていることが示されました。こどもを中心に据えることが、世代や立場を越えた関係性を育てていくことについて、確認される場となりました。

<パネルディスカッション>

●多様性と持続可能性を支える、こども中心のコミュニティづくりとは

「フィッシュボウル形式セッション」後半では、参加者が各団体の活動内容や思いについて記載したコメントをパネル上に貼り付け、そのコメントをもとに展開する「パネルディスカッション」が展開されました。ディスカッションでは、居場所での食や体験を共にすることの重要性や、多様性を実現するための実践、そして活動を継続していくための課題について、立場の異なる登壇者から意見が交わされました。シリコンバレーでのシェアハウス運営経験をもつコロリドージャパン合同会社代表 竹内 ひとみ氏からは、「食卓を囲むことが人の心を開き、言語や文化、世代の違いを越えた自然な対話を生み出す」という経験が語られました。また、こどもが場の中心にいて、大人の行動やモラルが高まり、安心感のあるコミュニティが形成される点も共有されました。一方で、こども食堂や地域活動を続けていく上での課題として、経済的な持続可能性が挙げられた際には、無償の善意だけに頼らず、活動団体と企業や金融機関、行政がつながる仕組みづくりの重要性が示され、地域金融機関がネットワークの中心として果たし得る役割についても言及されました。



PRESS RELEASE

また、「支援する側・される側」という関係ではなく、「一緒につくる仲間」として関わる姿勢が、人のつながりをサステナブルにするという視点も共有されました。活動が続ける中での迷いや壁、肩の力を抜くことに気づいた経験、先行する実践者の失敗談や助言が大きな支えになっていることも語られ、議論を通して、こどもをまんやかに据えながら、大人自身も無理をせず楽しめる余白を持つこと、そして人と人とのつながりを大切にするネットワークが、活動の継続と地域の力につながることで改めて確認される時間となりました。

■ こどもまんなかアクション 2025 年度 活動報告

イベントの第2部では、こども家庭庁 成育局 成育環境課長兼こどもまんなかアクション推進室長・安里 賀奈子より2025年度を通じて「こどもまんなかアクション」がどのように全国へ広がってきたのかについて報告が行われました。応援サポーター数やリレーションポジウム開催自治体数といった数値的な成果に加え、ホームページやnoteを通じた情報発信などの取り組みについても報告しました。

まず、「こどもまんなかアクション」の趣旨に賛同し、活動を発信する応援サポーターは、2025年2月2日時点で4,176団体・企業・個人に達し、前年から約1,200件増加するなど、着実に広がっていることを報告しました。新規参加団体の事例として、「#こどもまんなかやってみた」をきっかけにつながった「るりあるく」や、全国こども食堂支援センター「むすびえ」など、新規参加団体の一部を紹介しました。さらに、こうした取り組みを広く共有するため、こども家庭庁ホームページ内に「こどもまんなかアクション」の特設ページを設け、212件の事例紹介がされていることについても説明し、活動の可視化により認知が進み、新たな参加へとつながる好循環が生まれていると話しました。



PRESS RELEASE

また、全国展開の柱の一つとして実施している「リレーシンポジウム」について、北海道から沖縄まで、42 の自治体に参加し、それぞれの地域特性を生かしたテーマ設定のもと、「こどもまんなか」の理念を共有・発信してきたいままでを振り返り、東京都だけでなく、各地域から発信することの重視性を話しました。

さらに、応援サポーターとの連携イベントとして、「ユースのアクションサミット」や「こどもの居場所づくりオールミーティング」などを開催し、こども・若者自身が主体となる活動や、居場所づくりに関わる多様な立場の参加者による意見交換を通じて得た、次の行動につながる学びや気づきについて共有しました。これらの取り組みを通じて、自治体からは「地域全体で取り組むことの重要性」や「継続することが力になる」といった声が寄せられ、企業からは「社員の意識向上やブランディング、採用面での効果を感じている」との意見も紹介しました。また、こども・若者からは「意見を言えば社会が変わると実感できた」「楽しいから続けている」といった前向きな声も上がっているとさまざまな世代から寄せられたと報告しました。



今後の展望について、2026 年度以降も、引き続き全国各地で自治体と連携した「リレーシンポジウム」を開催するとともに、特に大学生をはじめとする若者世代への発信と対話を強化し、こども・若者の声を政策に生かす取り組みを進めていく予定だと語り、報告会は終了しました。

■「こどものまわりのおとなサミット 2025」開催概要

開催日時：2026 年 2 月 6 日(金)14:00~16:00(受付 13:45~)

会場：霞が関プラザホール

(東京都千代田区霞が関 3-2-5 霞が関ビルディング 1 階)

PRESS RELEASE

<メイン参加者>※敬称略

- ・荒木裕美 NPO 法人ベビースマイル石巻代表理事
- ・青砥和希 一般社団法人 未来の準備室理事長
- ・鈴木 学 株式会社埼玉りそな銀行経営企画部サステナビリティ推進室室長
- ・小浦 詩 NPO 法人 じっくらあと理事長
- ・吉村迅翔 一般社団法人 JUNTOS 代表理事
- ・宮内 孝 学校法人南九州学園南九州大学人間発達学部子ども教育学科 教授
- ・安藤温子 こども家庭庁 こどもまんなかアクション推進室 広報推進官
グラフィックファシリテーション 株式会社しごと総合研究所

<プログラム>

開会・こども家庭庁主催あいさつ/トークセッション/各団体の活動紹介
/クロージング/記念撮影

アーカイブ配信 公式 YouTubeURL : <https://youtu.be/EzKdVPzWCSc>

■「こどもまんなかアクション 2025 年度 活動報告」開催概要

開催日時 : 2026 年 2 月 6 日(金)16:15~17:00(受付 16:05~)

<プログラム>

開会・こども家庭庁主催あいさつ/年度活動報告プレゼンテーション(活動実績・各自治体・学生からの声・今後の展望)/質疑応答

■「こどものまわりのおとなサミット」とは

こども家庭庁は「こどもまんなか社会」の実現に向けて、こども・若者のみなさんの声を聴き、反映し、こどもや若者の視点に立った政策を推進しています。

「こどものまわりのおとなサミット」は、全国各地で“こどもまんなか応援サポーター”として活動する「こどものまわりのおとなたち」に焦点を当て、こども・子育て支援の現場で得られた知見の共有や意見交換を行い、「こどもまんなか」の実践を広げていく場とします。「こどもまんなか社会」の実現への一環として、ウェルビーイング (Well-being) の観点から、こどもが安心して過ごせる社会の実現に向けた議論も深めてまいります。